

村芝居座長日記

Diary of Mino-Kabuki Chairperson



小栗克介（おぐり・かつすけ）

岐阜県瑞浪市生まれ。1921～1999年

1969年に日吉ハイランド倶楽部ゴルフ場をオープン、

1972年美濃歌舞伎保存会結成。

ゴルフ場経営の傍ら、76年に相生座を創設して以来、毎年歌舞伎を公演。

1988年 岐阜県芸術文化活動等特別奨励

1992年 文部省文化功労章受賞

元岐阜県博物館協会理事、元岐阜県ゴルフ連盟理事、前岐阜県文化財保護協会会長

昭和39年、都市化の波にあえいでいた故郷

私が村芝居を復活させたいと、本気で考えるようになったのは、昭和39年からのことです。私は東京にいてゴルフ場の設計や工事、経営などの仕事をしていました。

そこへ郷里から友人が訪ねて来て、「地元でゴルフ場をつくって地域開発をしてくれないか」と言うのです。旧友の熱心な勧めに押し切られ、生まれ故郷の美濃の山村に帰って来ました。

そしてそこに見たのは、私の懐かしい思い出の村、あのおおらかな農村ではなくて、なんとも言いようのない、無情緒な、都会から押し寄せてくる経済攻勢の波にあえぐ、哀しい農村でしかなかったのです。

ある日、ゴルフ場開発用地の近くに住む老人が訪ねて来て、芝居の衣裳を助けてくれないか、と言うのです。この老人は、往年の村芝居の名優で、私も小学生のころにその舞台姿を観たことがありました。

老人は、「村芝居の衣裳、鬘（かつら）約4,000点が、今のままではだめになってしまう」と言うのです。

「見捨てられた村芝居を助けてくれ」 古老の叫び

この衣裳や鬘類は、江戸末期から美濃、飛騨、信濃、奥三河地方に、村芝居のために衣裳を貸していた家（古文書にもでてくる）のもので、特にこの地方の老人たちには愛着の深いものなのです。

この衣裳類が、テレビの普及とともに全く不要なものとなり、今は鼠の巣になってしまっていると言うのです。

この日、私は仕事のために忘れていた感傷に火を付けられたのです。老人の言葉に、農村文化の遺産を散逸させてはいけぬ、父や母たちの汗がしみているこの衣裳を、保護保存しなければならないと思い、全部引き取ったのです。

そしてこの衣裳を、今一度世に出そう、村芝居を復活させたい、と考えるようになったのです。





村芝居の復活へ、松本団升氏と共に

私と同じように、村芝居を大切に思っている人がいました。戦後ほとんど上演されることがなくなってしまった地歌舞伎という伝統を守り、教えている人がいたのです。恵那郡山岡町に住む松本団升という人でした。

私の手もとに、古い浄瑠璃本がたくさんありますが、その浄瑠璃本の中から「こういう芝居があるけれど、こんなものは今までやったことがないぞ」などというものがあると、その松本団升という、田舎芝居の師匠に相談する。師匠も研究する。古老にも聞いて歩く。そしてまず、怪しげな台本が出来上がるわけです。

そうです。怪しげな、です。浄瑠璃の本はある。チョボのほうはまともなのですが、さあ、所作の方がだいぶ怪しくなってくるわけです。

そうすると「そこの泣き落としのところは、何々の役のこの型をもってこよう」ということで、型の組み合わせでやるというような苦勞、苦勞というよりも、つくる楽しみが生まれてくるわけなんです。

忘れられてしまった所作、忘れられてしまった芝居というものが、この山村の伝統村芝居の中には、いまだに残ってるわけなんです。



大失敗、かつら付けずに舞台へ

しかし、この村芝居を始めて二年目に、まあ大失敗を一つやったんですよ。というのは、<太功記十段目>で、光秀の息子の十次郎が戦陣へ門出して行く。そのときはきれいな頭を結ってゆくわけなんです。そして次に、今度は手負いになって、花道から駆け込んでくるときは、さんばら髪なんです。

それで、いったん楽屋へ行って、前の鬘を外して、さんばら髪の鬘をかぶり直してくるわけなんです。夏で暑かったものですから、まあ、舞台へ出る直前でいだらうということでかぶらないでいたところ、忘れちゃって、髪なしで花道へたっただと出て行った。これは観衆も喜んだと思いますね。

村芝居の楽しさというものは、やる者も、見る者も本職じゃないが、それぞれみんなファンをもっている、固定したファンをもっているわけなんです。親類、縁者、そして近隣といった人たちです。

だから、役者が上手だろうが下手だろうが、ポンポンと“見え”をきるとばらばらと手ぬぐいが飛んでくる、みかんが飛んでくる、そして袋へ入れた祝儀が飛んでくる。まことに景気のいいものなんです。



勝手気まま、くつろぎ愉快的観客たち

「よかったぞ!」「日本一!」というような声が気楽に掛かる。しかし、芝居を全部見ているわけではないんですよ。あさってのほうを向いて、酒を飲んでいる者もいるわけなんです。

それでちゃんと知っていて、いいところへくると「ようよう」と声を掛ける。別にそれをとがめる者もないんです。

本当に好きな人は、舞台の真ん前に座って、役者と同じに、一緒に台詞（せりふ）を言いながら、首を振り回しているんです。

一言一言、役者が言うよりも早く台詞を言う観客がいて、しまいには役者が怒ってしまって「おまえ、黙っとれ」と、どなりつけることになってしまう。



舞台と観客席の息がつながり、そしてワツとくる

もう一つ。所作のいいところがあると、「いいぞ、もう一遍やれ」という声が掛かる。そうすると、もう一遍やってしまうんです。それも、義太夫も、相手の役者も全く関係なしで。実に楽しいものなんです。

ほんとうに舞台と観客席というものが交流している。息がつながっている。そしてワツとくる。それが冷やかしでもなければ、ばかにしたものでも、ほめでもない。

なんというか楽しいなあ、という喚声なんです。

こういうところが、村芝居の面白さではないですか。水も漏らさない、隙のない芝居じゃなくて、隙だらけで、しかもご本人は大まじめ。これも楽しいもんですね。



役者も裏方も、私の会社の従業員

私のところには、約130人の従業員がいて、その中でだいたい60人が男という職場です。芝居の稽古をやりようと思えば、「おい。何時から何時までは、何々の幕の稽古だぞ、集まれ」。これでできるわけなんです。

私も、従業員と一緒にやっている。従業員の諸君も小さいときから芝居を観ております。芝居をやった者もおります。子供の時代からやった者もいる。ですから、ずっと素直に芝居興行および芝居に入ってくるわけなんです。

従業員の中でも、営繕課長がなかなか上手なんです。毎年いい役は、ほとんど彼が独占というかたちで、今もめているんですよ。それから、厨房主任。これがまた大根のくせにばかに人気がある。この男は自分の家が養鶏業をやっておりまして、舞台に立つと、「よっ、ニワトリ屋っ!」という声が掛かったくらいで、すでに屋号がついております。それから立女形では、管理部の機械係。猿之助さんも「あれはなかなかうまいですね」と言っておりました。

初役で何をやらしてもできるというのが6、7人そろったのです。そこで、伝統的な村芝居を存続してゆこうかと、3回目ぐらいから本気になって考えるようになったんです。



相生座公演で挨拶する
市川猿之助丈（左）と小栗克介

昭和49年、市川猿之助さんがやって来た

猿之助さんが来たのは49年の8月で、3回目のわが社の芝居の興行のときでした。芝居をやっているなら、ぜひ私も見たいなということなんです。

「あんたみたいな本場の大役者が来たら、うちの役者はみんな縮み上がってしまって困るんだが」と言ったら「いや、私たちが勉強したいのだ」と言う。

よく聞いてみると、猿之助さん自身が歌舞伎の原点を求めているんです。地芝居の中に残っている特殊な型、そして芝居、役者と観客の心の交流、そういったものの真髓が知りたい、ということなんです。あの人は頭はいいし、非常に研究心の旺盛な人ですね。

あんな偉い人が来てもらっちゃ困るな、というのだけれども「まあ、それもいいんじゃないか、向こうは本職だし、こっちは素人なんだから。べつに、下手だっかまうもんか」ということになって、去年の練習はものすごい熱が入ったんです。

皆んなカセットテープを買って、台詞を師匠に吹き込んでもらい、行きも帰りもそれを聞きながらという状態でした。なかには、夜、裏山へ行って練習したという者もあったそうです。それはもう、まことにすさまじいものでした。

猿之助さんが来たときに、私は、何か一言話してくれと頼んだら、すっと立って「楽しい。楽しい芝居です。地芝居というものはほんとうに楽しいものですね」ということを言っていました。猿之助さんにほめてもらって、みんな喜んでいました。本職の人たちは、決してくさしませんよね。

「地芝居は焼酎だ。本役者歌舞伎は特級酒だ。

しかし、酔うのはどっちだ。焼酎の方が酔うぞ。

地芝居の面白さはそこだ。焼酎の酔いだよ。

うまいへたは乗り越えていますね。とにかく楽しい」。

これはまことに至言ですね。

だいじな衣裳 守り続ける大変さ

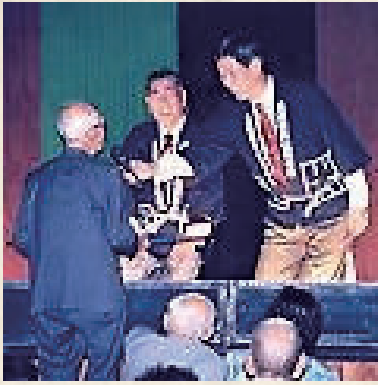
地歌舞伎の衣裳は何度も何度も使われてきました。江戸時代から伝えられてきた衣裳は大変傷んでいました。縫い取りといわれる刺繍の施された衣裳は、洗濯をすることができません。また、現代の人と比べ、体系的にも小柄だった時代の衣裳は小さい。時代は新しい衣裳を必要としてきた。

幸い、従業員の中に、大変器用な女性がいて、安藤家の衣裳を引き取ってから数年、安藤家の四代目の安藤すわ子さんについているうちに、覚えてくれたのです。地歌舞伎の衣裳方は、衣裳立て、衣裳の手入れ、補修、鬘の結い上げまですべてをこなさなくてはなりません。大変な仕事です。現在では、古い衣裳を参考に、同じ型のものを新しく作ったりもしてくれています。

古いものを再現するというのは、これがまた大変です。現代の布ではだめなんです。布の材質や、模様にある程度のきまりがあって、何でもいいというわけではないのです。古い布を探すのが一苦労です。



ありし日の安藤すわ子さん



毎年恒例の敬老公演

楽しい伝統300年、村芝居の火は消さず

村芝居の歴史なんていうと、まことにむづかしい話になりますが、日本三大地歌舞伎と美濃歌舞伎の発生と伝承については、私なりに研究しております。要するに、水にわたったボウフラのようなもので、300年ぐらい前から自然発生のようなかたちで生まれ、普及し、伝承され、とにかくあったのです。

村芝居という楽しい行事が、一年に何回かあったのです。もちろん、無料。小屋掛けなんですけれども、てんでに各人がお重に食べ物をいっぱい詰めて、お酒を飲んでお煮しめ食べて楽しんだ。日没から始まるのですが、終わるのが夜明けの3時、4時。一晩中食べたり、飲んだり、騒いだり、そうしてその合間に芝居を観て楽しんだわけです。

私は、そうした社会背景の中に生まれ、そして芝居が血の中に流れて今の芝居が好きで、物好きな“オグリ”という人間ができ上がってしまったと考えているのです。私の父、そして母も、顔を塗って衣裳を着て、舞台に立ったという半世紀の思い出が、今はこの上もない大切なもののように考えられてなりません。

そんな村芝居がすたれてゆくのはほんとうに惜しいと思います。幸い、今やってくれている人たちが、裏方からいっさい、自分たちでやれるようになってきているので、立派に続けていってくれると思うのです。

また、息子や娘そして孫までが私の気持ちを引き継いでくれていることは、心強いことだと思っています。

昭和51年には、念願の芝居小屋「相生座」（約100年前の芝居小屋を移築復元）、「美濃歌舞伎博物館」を完成しました。

そこに江戸時代、明治、大正、そして昭和の四世代にわたる地芝居の衣裳を展示して、一般に開放して皆さんに喜んでいただいているのです。

そんな私は、ほんとうに幸福者だと思っています。



現在の衣裳保管庫の開所式

岐阜新聞社「美濃の地歌舞伎」より